

上勝中学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- 「気づき」を大切に、「主体的・対話的で深い学び」を実現する課題設定の工夫
- GIGAスクール構想の実現に向けた取組の推進
- 将来を描く力を身に付けるためのキャリア教育の充実

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員
湯浅 璃緒	校長：大井 育代 教頭：山田 孝志 教務主任・2年主任：中川 一英 1年主任：杉本 良 3年主任：福良 毅

校長

大井 育代

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

○次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○全般的に素直で前向きで、何事にも真面目に取り組むことができる。 ●実力テストなどの出題範囲が広いテストでは、単元末テスト(令和4年度から実施)と比べ正答率が下がる。	・授業に主体的に取り組み、基礎的・基本的な知識・技能を習得することができる。 ・知識・技能の定着を図るため、家庭学習及びテスト前の学習に計画的に取り組むことができる。	・単元末ごとにテストを行い、短期間で確認をしていくことで、知識・技能の定着を図る。また、テストごとに目標点を設定し、未達成者は補充学習を行う(目標点達成率80%以上)。 ・実力テスト前に部活動休止期間を設定し、計画的に学習に取り組む環境を作る。そのためにも、担任や各教科担任が家庭学習の仕方等を指導する時間を設ける。	実力テスト前には、下校するまでの間の時間に質問教室や自主学習の時間を取り入れ、生徒が計画的に学習することや自主的な学習を促す。	年度末の単元末テストに対するアンケート結果から「学習に対して前向きになった」、「学力が身についた」という意見等、生徒・保護者ともに肯定的な意見が多く見られた。しかし、単元末テストへの慣れによる緊張感の欠如、生徒の負担感、実力テスト等への対応、授業時数等を心配する声も上がった。	単元末テストの実施を続けるにあたり、さらに効果的な実施方法について考える必要がある。また、目標未達の生徒の固定化やモチベーションの低下を改善するためにも生徒が学習に前向きに取り組めるようにする。他校の事例から学んだり教員の研修を行った等、全ての生徒の学力向上を図ることに努める。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○授業中に進んで発表し、課題に対して意欲的に取り組むことができる。 ○生徒数が少ないため、学校生活の中で一人一人が活躍する場面が多い。 ●思考力や長文での記述を必要とする問題では、他の問題と比べ正答率が下がる。	・自分の考えを、根拠や理由を明確にしながらか説明したり書いたりして伝えることができる。 ・各授業における課題に対する話し合い活動を通して、解決する方法を考えることができる。	・テーマを決め、生活記録に自分の考えや意見を書かせ(3文以上)、コメントを書いて返す。 ・学校生活の中で、各学年の生徒が大人数の前で発表できる場面を設定する。 ・生徒の発言や発表の内容に応じ、「なぜ」「どうして」などのさらなる発問を行い、生徒の考えを深めさせる。 ・新聞を活用した取組や作品の応募を通して、表現する機会を増やす。	生徒の思考力・判断力・表現力を養うため、各教科の授業の中で、生徒が自ら考えたことを話したり発表したりする場面を意識的に多く取り入れる。	・テーマを決め、生活記録に自分の考えや意見を書くことで、様々な課題について考える力が養われた。また、生徒の文章力や表現力の向上を図るために、授業や宿題等で新聞を積極的に活用したことも、自分を表現する機会につながった。生徒の考えを深めるための発問を、各教科で積極的に行うことで、根拠と理由を明確にして考えることができるようになった生徒が多くなったように感じられた。 ・職場体験学習の発表等で、生徒は声の大きさや視線など、相手を意識して発表・発言することができた。しかし学年によっては、自分たちの取組を大人数の前で発表する機会がない学年もあり、授業でも発表となると消極的になる生徒が多かった。	生徒がより意欲的に取り組めるよう、課題の出し方や設定の工夫が必要である。また学校生活の中で、多くの生徒が発表できるような場面を設定し、自分を表現する機会を増やす必要もある。各授業でも授業計画のさらなる改善を進めるとともに、教員・生徒のICT活用能力を高め、生徒の思考力・判断力・表現力の向上に努める。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ノーチャイム着席、朝の自習、エクストラスタディーズなど、基本的な学習規律を守って学習に取り組むことができる。 ●課題を期限内に提出することができない生徒もいる。 ●単元末テスト後のレビュータイムに参加する生徒が固定化されており、生徒のモチベーションの低下が見られる。	・各教科の学習に主体的に取り組むことができる。 ・自分の学習の状況をしっかりと振り返り、自らの課題を解決できるよう計画を立て、実践することができる。	・「授業のめあて」「学習の流れ」「学習のまとめ」を提示し、生徒に振り返りをさせる習慣をつけさせる。 ・タブレットのドリル教材を活用し、生徒自ら学ぼうとする姿勢をつけさせる。 ・学習サイクルを確立するように、単元末テストに向けた家庭学習を行うように支援する(提出物の提出率90%以上)。また、十分な自主学習の時間を設けるためにも、自主学習の内容を各教科の提出物で代用可とし、生徒の負担軽減を図る。	・「授業のめあて」「学習の流れ」「学習のまとめ」の提示を改めて、教員間に周知する。 ・教科によっては、タブレットのドリル教材以外も、朝の活動の時間に取り入れる。	・朝の活動の時間をほとんどの生徒がまじめに取り組めたが、中には少しの時間でも有効に使うという意識が低い生徒もいた。 ・単元末テストをこまめに行うことで、ほとんどの生徒が期日を意識して課題を提出することができた。しかし、中には学習サイクルの確立が難しく、提出物がなかなか提出できない者もいた。	生活調査のアンケート結果から、生活の乱れが目立つ生徒もいた。学習サイクルの確立のためにも、家庭との連携を図りながら生活リズムの指導や時間の使い方、自主学習の仕方等の指導を行う。

令和5年度 学力向上ロードマップ

